

— UCDAアワード2010 —

選考結果報告会開く

生保各社などから100人が出席



大同生命宮本執行役員(右)と UCDA 福田理事長

一般社団法人ユニバーサルコミュニケーションデザイン協会(福田泰弘理事長、以下UCDA)は7月16日、日本外国特派員協会(東京都千代田区)で「UCDAアワード2010」帳票分野総合通知部門の選考結果報告会を開催した。生保各社が年に一度、すべての契約者に対して「ご契約内容のお知らせ」などの名称で送付する「総合通知」をデザインの視点から評価したもの。国内生保21社が帳票を提供し、初代アワードには大同生命が選出された。当日は生保各社などからを中心に、100人以上が出席した。

表彰に先立ってあいさつした福田理事長は、多くの生保から帳票提供などの協力があつたことに謝意を示し、「いよいよ日本は超高齢化社会に突入し、ユニバーサルな環境をつくるのが企業イメージの向上に直結する時代に入った。今後も皆さまの役に立つ活動をしていきたい」と抱負を述べた。初代アワードを受賞した大同生命の執行役員で契約サービス部長の宮本



パネルトークのようす

弘文氏は「ここ数年、社内から帳票の見直し作業を行ってきた。今回の受賞は社員一同にとつて大きな喜びだ。今後の励みにしたい」と語った。

氏(日本代協認定保険代理士)、武者廣平氏(㈱武者デザインプロジェクト代表取締役)、佐々牧雄氏(ユーザビリティコンサルタント)、前場保氏(情報デザイナー)の4人が、「わかりやすい総合通知とは」をテーマに「評価を通じて感じたこと」「総合通知を製品として考えた際の消費者視点とは何か」「多種多様な契約者のニーズに帳票はどうか」という意見を交換した。報告会ではこのほか、UCDAが独自に開発した帳票に特化したフォント「UCDAフォント(仮)」や、視線追尾分析サービス「アイ・トラッキング・アナリスト(ETA)」を9月にリリースすると発表。ETAでは、ユーザーが帳票をどのよう視認・認識するかを測定するだけでなく、問題箇所の原因も特定できると説明した。また、7月27日にはUCDA初のオープンセミナーを東京電機大学で開催することも発表し、参加を呼び掛けた。

講評では、評議員を務めたUCDA理事の永井順國氏(国立政策研究大学院大学客員教授)が「昨年のプレアワードと比較して、今回は明らかに改善が各社で見られた」と述べ、今後のさらなる改良への期待を寄せた。引き続き行われたパネルトークでは、今回の評議員を務めた萩原忍氏(財団法人日本消費者協会出版啓発部部長)、小池克弘